

集中力に貫かれた ティーレマンの指揮

「50年前は季節外れの雪に見舞われた初日だった」とクリスタ・ルートヴィヒとグンドラ・ヤノヴィッツが遠い目で振り返るザルツブルク復活祭音楽祭は、4月8日、初夏のような太陽に祝福されて50周年を迎えた。

50年前の舞台装置を再現し、ブルガリア系ドイツ人のヴェラ・ネミローヴァが新演出したワーグナー《ワルキューレ》に観客は惜しげもなく拍手を贈った。ネミローヴァも「古い舞台装置で伝統にのっとりながら、現代人も共感できる折衷案を見つけたのが非常に困難だったが、苦勞が実った」と満足げに話してくれた。

クリスティアン・ティーレマンの指揮は強靱な集中力に貫かれ、常に新しいインスピレーションを提示しながら、長丁場を振り切った。ドレスデン・シュターツカペレの音は研ぎ澄まされて、限界に挑戦するかのような弱音も美しかった。それもそのはず、ほとんどの首席奏者はバイロイト音楽祭の演奏体験者だという。終幕のヴォータンとブリュンヒルデの別れなど、長いスパンのレガートでも音楽の方向性と緊張感は失わず、リスタと隣り合わせで、演奏しきった後の感動は大きかった。

成功に貢献した歌手陣

その成功にはもちろん歌手陣も貢献している。ジークムントのペーター・サイフェルトはさすがに声をセーヴするような箇所も多かったが、キメる部分では決して失望させることはない、ヘルデンテノールとし

50年前の舞台装置を再現した「新演出」《ワルキューレ》

取材・文=中 東生
Text=Shimobu Naka

創立50年を迎えた 「ザルツブルク復活祭音楽祭」

4月8日から17日にかけて行われた「ザルツブルク復活祭音楽祭」。故ヘルベルト・フォン・カラヤンによって、ワーグナーの楽劇の上演を最大の目的に1967年に設立され、今年創立50年を迎えた。記念年の目玉は、芸術監督クリスティアン・ティーレマンの指揮するワーグナー《ワルキューレ》。なんと50年前の舞台を再現して「新演出」で上演するという。



芸術監督ティーレマンがウィーン・フィルを指揮した
《第九》から ©OFS / Matthias Creutziger



The 50th Anniversary of Osterfestspiele Salzburg



全員が立派な歌唱を聴かせたワルキューレたち ©OFS / Forster

ての健在ぶりを示した。フンディンクのゲオルク・ツェッペンフェルトは瑞々しい声と明瞭な発音で「楽劇」を引き締めた。ヴォータンのヴィタリ・コワリョフはオーケストラを越える声量と柔らかさ、色気まで兼ね備えた現在最高のヴォータンの一人と言えよう。アニヤ・ハルテロスは、柔らかい声で歌う清楚なジークリンデが、愛に賭ける情熱を得た後、母としてお腹の子を護る強さに至るまでの成長を声で聴かせた。ブリュンヒルデのアニヤ・カンベは危なげな部分もあったが全力投球し、フリツカのクリスタ・マイヤーは余裕を持って歌い切った。またティールレマンが記者会見で自慢気に言及した通り、ワルキューレの全員が立派な歌唱を聴かせた。

が続いた。バイエルン放送交響楽団のフォーレ「レクイエム」とサン＝サーンス「交響曲第3番《オルガン付き》」を聴いた。この演奏会の主役は、豊かな倍音を持ちつつ、完璧に統一された合唱団だった。それに引き換え、ソリストはアンナ・プロハスカもアドリアン・エレードも、いつになく息が流れず、声が喉に貼り付いたようで、音程も低めだった。ジョン・ミヨンフンの指揮という観点から見ると、静と動の両極を聴けるプログラムだった。

ウイーン・フィルと バイエルン放送響、他

その他、ハルテロス、マイヤー、ザイフェルト、ツェッペンフェルトのソロでウイーン・フィルハーモニー管弦楽団と共演したベートーヴェン《第九》も、ティールマンのベートーヴェンへのアプローチをウイーン・フィルで実現するという点に、一種の意義が感じられた。多少野暮だが奥深い《第九》で、各楽器の旋律が語りかけるように何重にも重なって紡ぎ合わせる。ソロもハルテロスが多少テンポに乗れていないほかは豪華だった。

続いてバイエルン放送交響楽団のフォーレ「レクイエム」とサン＝サーンス「交響曲第3番《オルガン付き》」を聴いた。この演奏会の主役は、豊かな倍音を持ちつつ、完璧に統一された合唱団だった。それに引き換え、ソリストはアンナ・プロハスカもアドリアン・エレードも、いつになく息が流れず、声が喉に貼り付いたようで、音程も低めだった。ジョン・ミヨンフンの指揮という観点から見ると、静と動の両極を聴けるプログラムだった。

変わり種では、サルヴァトーレ・シヤツリーノの室内オペラ《ローエングリン》も、サラ・マリア・スンという最適な演者を得て、興味深い上演となった。

バイロイト音楽祭とウイーン国立歌劇場との間に確執のあったカラヤンが、故郷で最高のワグナー・オペラを上演するために、演出にも隅々まで心を砕き、自費で始めたこの音楽祭が、今日これだけ多角的になり、皆に愛でられているさまを見たら、大満足であろう。

横たわるブリュンヒルデ（中央上、アニヤ・ケンベ）は父ヴォータン（中央下、ヴィタリ・コワリョフ）によって炎に包まれる。大成功をおさめたティールレマン指揮《ワルキューレ》のシーンから ©OFS / Forster

